

機関番号：34412

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500708

研究課題名(和文)運動意欲の発達の变化に関する定性的研究

研究課題名(英文)Qualitative analysis about developmental changes of exercise motivation

研究代表者

堀井 大輔 (HORII, DAISUKE)

大阪電気通信大学・医療福祉工学部・准教授

研究者番号：20340424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：運動意欲の発達の变化について、個人の具体的な体験を定性的に意味づけて、新たなモデルを構築し、運動実践に向けての提言を行なうことを目的とした。結果として、成人では、少年期にみられるような自己に対する期待感や運動への肯定的な価値付けが小さいモデルが採択された。これには心理的な成長過程が関連していると考えられ、運動やスポーツ場面では、それぞれの発達段階を考慮した適切な働きかけが必要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：Previous researches have not very much scrutinized personal reports of personal experiences concerning exercise motivation; they concentrate on how their models that were made in an a priori way would work for causal relationships or relevancy observed in questionnaires. This research about developmental psychology models employs text mining for text categorization and its analysis.

The analysis was made to observe how the result was interrelated with exercise motivation. The analysis indicated (i) that the items of father and siblings were closely related with self (a subject) in this parameter, and (ii) the items of mother and people around self (no family member) showed a remote relationship. Furthermore, the analysis suggested that exercise motivation for the high group was closely associated with terms such as fun, sports, watching, skilled, practice, and improving. On the other hand, that of the low group was closely associated with terms such as partner, rival, and dislike.

研究分野：スポーツ心理学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：運動意欲 発達 心理 定性的分析

1. 研究開始当初の背景

パーソナリティ特性への遺伝と環境の影響に関する研究では、これまで行動遺伝学的見知から継続的にアプローチされている。とくに、運動意欲の個人差については、遺伝要因の影響よりも環境要因の影響の方が大きい傾向にあるという研究結果が示されている(堀井・奥田,2000;Horii and Okuda,2000;奥田・堀井,2001)。この環境要因とは、父親・母親の養育スタイル、きょうだい要因(出生順やきょうだい構成)、きょうだい関係のあり方、「家族メンバーを異ならせるように作用する要因」である非共有環境等である。これらがそれぞれに影響を及ぼしているが、とくに非環境要因の影響が大きい傾向にあることが確かめられている(Horii and Okuda,2005;Okuda and Horii,2007)。

以上の研究を含む国内外の研究では、質問紙調査からその関連性や因果関係を明らかにし、構築したモデルを分析するにとどまっておらず、生涯発達の観点からモデルを構築する研究は希少であると言わざるを得ない。つまり生涯発達の観点から定性的に分析・考察することは、よりオリジナリティの強い研究となるのである。

そこで本研究では、これまで蓄積されてきた定量的な基礎エビデンスに基づいて、個人の具体的な体験についての意味づけを発達の観点から定性的に研究することとする。そのことによって、個人の心理的成長過程を明確にでき、運動意欲についての新たな知見が生成されるとともに、運動学習場面における介入方略の提言を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究は、運動意欲の発達的变化モデルに関して、定性的に分析することを目的としている。この目的達成のために以下の3つの研究課題を設けた。

(1) 既存の生涯発達モデルを概観し、運動意欲の発達的变化に援用できる側面を包括的に検討する(文献研究)

(2) 運動意欲に対して継続的な定性的調査を実施する(実践研究)

(3) 運動意欲の発達的变化モデルを導き出し、有効な提言を行う(臨床への介入)

これらの課題を解決するため、まず、質的研究法に関連する先行研究を概観・整理することで、研究手法の熟達を目指し、調査の観点や進行方法、タイムスケジュール、定性的データ収集の仕方や観察記録の取り方など、一貫性かつ柔軟性を有する調査マニュアルを作成した。さらに、生涯発達心理学研究において、これまでに導き出された優れた知見(特に、Levinson(1978)や Bridges(1980)によって導き出された一定レベルの発達モデル)を概観し、整理することによって、運動

意欲の発達的变化に伴って直面する課題を予測した。

なお、これまでの一連の継続的な研究と今回の研究成果を発展させるために、国内外の学会等で積極的な発表活動を行い、そこでのディスカッションを踏まえた上で、研究の方向性を再検討しつつ、研究成果の整理を行っていくこととする。

3. 研究の方法

(1) 年度計画

研究手法の熟達(研究手法を充分利用するために取り組むべき前提)

質的研究法に関連する先行研究を概観・整理することで、研究手法の熟達を目指す。このことによって、調査の観点や進行方法、タイムスケジュール、定性的データ収集の仕方や観察記録の取り方など、一貫性かつ柔軟性を有する調査マニュアルを作成することができる。

生涯発達心理学研究の優れた知見を概観し、整理する(発達課題についてのレビュー)

生涯発達心理学研究において、これまでに導き出された優れた知見を概観し、整理することによって、運動意欲の発達的变化に伴って直面する課題を予測する。とくに、Levinson(1978)や Bridges(1980)によって導き出された一定レベルの発達モデルを参考にしつつ、本調査における到達目標をあらかじめ決定しておく。

運動意欲の心理・社会的発達課題の検討

調査マニュアルを基に、男女の被験者を対象として集中的なデータ収集を実施する。その際、資料として抽出するのは、テキストデータである。そして、その資料から、表象の特徴を分析し、分析による個人にとっての運動の形態や意味づけ、体験様式等を明らかにする。

研究成果の妥当性・信頼性を高めるための努力

本研究は、質的心理学の手法を駆使することから、従来、この領域で呈されている「研究成果の妥当性および信頼性」を高めるための努力を怠ってはいけぬ。したがって、個人の主観的な解釈に陥ることを避けるため、当該分野の専門研究者から助言を得る内諾を得ており、本研究から得られた知見の整合性を検討する。

運動意欲の発達モデルの提案

本研究の成果の一般化へ向けて、運動意欲の発達的变化モデルを仮説的に構築し、成果報告をまとめる。すなわち、彼らの経験と運動意欲がどのように発達的に変化していったのか、といった観点から専門的介入方略を提唱する。

研究過程で得られた知見の発表

本研究の成果を国内外の学会で発表し、研究成果報告書を作成し、広くその是非を問う。

(2) 調査内容

運動意欲に関する調査

猪俣・猪俣(1988)によって標準化された運動意欲を測定する質問紙 MIPE を小学生用と大学生用に加筆・修正した質問紙を作成して利用した。MIPE は7つの下位尺度(自己概念(有能感)、親和欲求、競争意欲、価値観、達成意欲、活動欲求、失敗回避動機)の45項目で構成されている。

自由記述

自分自身の運動意欲に影響を及ぼしたと考えられる事柄について自由記述を求めた。あるいは体を動かす遊びやスポーツについて、被験者自身の考え方を回答してもらう形式で行った。これらの実際の運動経験に関する具体的な記述(いつ、だれと、どんなことをして、どんなふうに思ったか等)は、自分以外の誰との関連性が深い事柄であるかも明確になるよう求めた。

(3) 分析方法

運動意欲の質問紙に関する分析は IBM SPSS Statistics 22 を用い、因子構造の確認、運動意欲の高群と低群の比較、自由記述から得られたデータとの対応分析を行った。

自由記述の分析には IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を用い、書かれた文章の内容を感性的視点によって<良い 楽しい>や<悪い お叱り>等に解析するタイプ別の分析、形態素へ分解された単語の出現頻度をまとめるキーワード分析を行った。キーワードの抽出には、被験者の回答が肯定的か否定的か等の意味を把握するために感性分析を用い、カテゴリーの作成では、言語学的手法に基づくものと出現頻度に基づくものとを併用してカテゴリー化を行った。なお、ここで得られた結果はエクスポートし、定量データとして扱い、定性的データと総合して考察することとした。

4. 研究成果

(1) 運動意欲の因子分析

MIPE を用いたデータ収集から因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、第1因子に身体活動欲求($M=3.33, SD=1.40$)、第2因子に競争欲求($M=3.51, SD=1.26$)、第3因子に親和欲求($M=3.51, SD=1.08$)という下位尺度が確認された。

(2) 自由記述についての分析

感性タイプとの関連性

自由記述文から抽出されたキーワードすべてに割り当てられたタイプ別に分類し、出現頻度に基づくカテゴリーを作成した結果、運動意欲を向上させる存在と低下させる存在は次のとおりであった。運動意欲を向上させる存在：先生、友達、父、母、監督・コーチ、兄、先輩、高校、中学、部活動、姉、小学校。運動意欲を低下させる存在：先生、母、父、友達、監督・コーチ、高校、中学、先輩。

つまり、先生・父・母・友達・監督・コーチ・先輩等は、運動意欲を向上させることもあり、逆に低下させることもあることから、どのようにして各自が彼らとの関係性を肯定的に価値付けたか否かが重要となる。

一方、運動意欲を向上させた記述(テキストデータ数 1212)をみると、キーワードの抽出後に出現頻度に基づくカテゴリー化を行った結果、19カテゴリーが検出された(<良い 良い>、<良い 楽しい>、<その他 激励>、<その他 要望>、<悪い 悲しい>、<良い 褒め・賞賛>、<悪い 悪い>、<良い 嬉しい>、<良い 好き>、<良い 感謝>、<その他 驚き>、<良い 吉報>、<悪い 怒り全般>、<良い 満足>、<悪い 悲しみ全般>、<その他 提案・忠告>、<悪い 不満>、<悪い 残念>、<良い 喜び全般>)。さらに、運動意欲を低下させた記述(テキストデータ数 518)をみると、キーワードの抽出後に出現頻度に基づくカテゴリー化を行った結果、14カテゴリーが検出された(<悪い 悪い>、<悪い 不満>、<良い 楽しい>、<良い 良い>、<悪い 悲しい>、<悪い 悲しみ全般>、<悪い 怒り>、<悪い 嫌い>、<悪い お叱り>、<悪い 批判>、<悪い 不快>、<良い 褒め・賞賛>、<悪い 残念>、<その他 激励>)。

つまり、運動意欲を向上させた出来事は、男子において、提案・忠告・驚き・激励・満足等のタイプであり、女子において、喜び・感謝・満足等の肯定的タイプであったが、悪いという否定的タイプも存在した。したがって、褒め賞賛することは重要であるが、一般的に否定的な関わりであっても、本人が肯定的に意味付けるような叱咤等是有用だと考えられる。さらに、運動意欲を低下させた出来事は、男子において、良い・褒め・賞賛・悪い・批判・不満・悲しい等のタイプであり、女子において、悪い・不満・嫌い・不快・残念等のタイプであった。したがって、男子や女子の運動経験の少ない者にとっては、悪いという否定的な出来事が運動意欲を低下させるが、男子の運動経験の多い者にとって、必要以上に褒められたり賞賛されたりすることや他の遊び等の存在が運動意欲を低下させたと考えられる。運動意欲の差異が生じる要因は、自分自身の成功体験の認知や、比較や競争の対象となる他者との関係性であると考えられるが、他者からの賞賛や叱責、あるいは個人の否定的な感情をどのように価値付けるかが複雑に交錯していると推察される。

運動意欲下位尺度との関連性

身体活動欲求に関連した記述では、「最初はぜんぜんうまくできなかったけど、練習試合などをしていたらだんだんうまくなってだんだん楽しくなっていた。」のように楽しさや達成感等がみられた。競争欲求に関連した記述では、「優勝できてとても嬉しかっ

た」「ベスト4に入れなかったので、ものすごく悔しかった。」のような勝利の嬉しさや敗戦の悔しさ情けなさ等がみられた。親和欲求に関連した記述では、「みんなと遊んで楽しいしなんかうれしくなる。」みんなと協力してするのは楽しい」のような仲間との絆や感謝等がみられた。いずれも自己形成と他者の存在についてのものであった。

児童期ではサッカー・ドッジボール・野球のような遊び・運動を行いながら、みんな・試合・練習・チーム・勝つ・優勝等のキーワードとともに遊び・運動経験を肯定的に価値付けていることが確認された。つまり、子どもの成功経験・失敗経験の少なさや自己評価・自己認知の正確性から、成人にみられるような運動に対する否定的な価値付けの割合が低いと考えられる。

対応分析では、男子は、身体活動欲求が高い群・競争欲求が高い群・良い・嬉しい・楽しい等の肯定的タイプに関連が強く、女子は、身体活動欲求が低い群・親和欲求が高い群・悪い・悲しみ等の否定的タイプに関連が強いことが確認された。

男子でこのような傾向がみられたのは、挑戦志向の強い時期であることや自己有能感の高さにも関係している反面、自己の能力を客観的に把握できていないとも考えられる。一方、女子の身体活動欲求が低下傾向にあることは、他の遊び・習い事等の存在によって、あそび・運動に対しての価値を相対的に低めていると推測される。また周囲との関係性の変化や遊び・運動課題の難易度が変化することで、それらを解決できない場合に自己防衛することや自分にとって都合の良い事のみ価値を認めようとする働きとも関連していると考えられる。

したがって、成人になるとさらに少なくなる自己に対する期待感や運動への肯定的な価値付けを促すためには、発達段階を考慮した適切な働きかけが必要であると思われる。

(3) まとめ

運動意欲に影響を与える存在はさまざまであるが、被験者自身が彼らとの関係性の中で自己の有能感をどのように変化させているか、またその運動行動をどのように価値付けるようになるかによって、自身の運動意欲が向上あるいは低下するものと考えられた。また、個人に対する運動意欲への影響を発達的な観点で捉えた場合、同じ環境がすべての者に同様の影響を与えているのではなく、個々人が置かれている環境をどのように捉えているかによって、運動意欲への影響も変化すると考えられた。

自己像の発達とのかかわりにおいて、年齢が増す毎に他人との比較や周囲への意識が増加し、運動に対する自己有能感や課題の価値について変化がみられた。さらに、運動によって達成しようとする課題についての価値意識が変化することが挙げられる。児童期では課題そのものに関する興味等に重点が

置かれるのに対して、青年期以降では課題の有用性とも関連させるようになり、その後は日常生活との繋がりや生涯的な観点から運動を捉えるようになることが導き出された。

以上のように、運動意欲の差異に影響を及ぼす要因は、それぞれの心理的な成長過程と関連性が高いため、運動・スポーツと人格変容に関する諸問題も考慮に入れつつ、運動学習場面において発達段階を考慮した適切な働きかけが必要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 4 件)

発表者：OKUDA Enji, HORII Daisuke, OKUDA Aiko, KANEDA Hiratoshi
発表標題：Sibling Resemblance For Exercise Motivation In Japanese Samples
学会等名：The Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences 2014
発表年月日：2014年03月27日～2014年03月30日
発表場所：RIHGA Royal Hotel Osaka

発表者名：堀井大輔・金田啓稔
発表標題：子どもの運動意欲と遊び・運動経験様式の関連
学会等名：日本体育学会第64回大会
発表年月日：2013年08月28日～2013年08月30日
発表場所：立命館大学びわこ草津キャンパス

発表者名：堀井大輔・金田啓稔
発表標題：運動意欲と過去の経験の対応関係
学会等名：日本体育学会第63回大会
発表年月日：2012年08月22日～2012年08月24日
発表場所：東海大学湘南キャンパス

発表者名：Daisuke horii, Enji okuda, Hiratoshi kaneda
発表標題：Qualitative Analysis of Individual Factors Affecting Exercise Motivation
学会等名：The Association for Applied Sport Psychology (AASP) 2011 annual conference
発表年月日：September 20-24, 2011
発表場所：Honolulu, Hawaii

6 . 研究組織

(1)研究代表者

堀井 大輔 (HORII DAISUKE)

大阪電気通信大学・医療福祉工学部・准教授

研究者番号：20340424